ライフステーション
杖立ラボ

杖立ラボ

九州工業大学 景観工学まちづくり研究室
(株)エスティ環境設計研究所

杖立ラボは
外部組織とゆるやかに連携しながら
運営・持続されていく
プロジェクトです。

杖立ラボは
地域デザインという切り口から
風景やライフスタイルを提案していく
プロジェクトです。

■杖立ラボ設立の背景

熊本県小国町の杖立地区は開湯以来1700年を誇る温泉街である。温泉街が賑やかであった昭和中期頃には、他の地域では真似ができないほどの、ハイカラで粋な文化が築かれていた。「福岡の奥座敷」と呼ばれ、都市の人たちがうらやむほどの生活文化(=ライフスタイル)が杖立では実践されていたのである。しかしながら、バブル期をピークに観光客が減りつづけ、同時に過疎化も急速に進行している。また旧来から持続するコミュニティにより、地域づくりがスムーズに実践されにくくなっているなど、地方特有の課題を有している。
このような現状を打破すべく、2003年には杖立景観基本整備計画が策定された。この計画の中では「動線・たまり場の計画」、「森と緑の計画」、「情報提供の計画」という杖立温泉が取り組むべき課題の抽出と、それらを実際に実行に移すための「まちづくりの仕組み」が提案されている。この「まちづくりの仕組み」が、『杖立ラボ』である。

■杖立ラボの概要

「杖立ラボ」とは、杖立温泉街の地域づくりをスムーズにコーディネートしていくため、第３者的主体として空間整備に対する住民意識への働きかけはもとより、観光客と住民それぞれへの情報発信、環境を活かしたイベントの企画、実施などを行うまちづくり機関であり、プロジェクトである。
このプロジェクトは、九州各地の大学をはじめ、地域デザインに関わる外部組織とゆるやかに連携しながら、先進的な地域デザインを実践していく現場として機能させ、同時に学生の人材育成の場としても機能するよう配慮し、運営を行うものである。

【代表・現場スタッフ】
田北雅裕（九州工業大学大学院 工学研究科
建設社会工学専攻 博士後期課程）

【協力スタッフ】
仲間浩一（九州工業大学工学部建設社会工学科 助教授）
徳永　哲（（株）エスティ環境設計研究所 代表取締役）
合源万貴（マルマタ林業 株式会社）
景観工学まちづくり研究室

■『杖立ラボ』の特徴と活動

『杖立ラボ』は、九州工業大学景観工学まちづくり研究室の学生が杖立温泉街に移り住み、2005年3月に設立した。九州工業大学 景観工学まちづくり研究室（福岡県北九州市）、（株）エスティ環境設計研究所（福岡県福岡市）の協力のもとで運営を行っている。『杖立ラボ』の特徴は、町役場や杖立住民など小国町・杖立温泉街を取り巻くまちづくりにかかわる多様な主体から一線を画し、第3者的立主体としてまちづくりを行っていることが挙げられる。活動としては、インフラ整備の際の住民参加型ワークショップ（以下：杖立ラボの会）の開催を初めとして、空間整備に対しての住民意識への働き掛けはもとより、観光客および住民への情報発信、地域性を活かしたイベントの実施等、まちづくり全般のコーディネート・企画・実施を行っている。拠点となるオフィス「ライフステーション　杖立ラボ」は、路地裏にたたずむ、昭和中期頃まで遊技場だった空き店舗を再利用・改装したものである。

『杖立ラボ』では、様々な観点から小国町・杖立温泉街の地域づくりを実践している。その中でも、情報発信としては、①webによる情報発信②杖立ラボの会における情報の共有がある。webによる情報発信としては、杖立の内外に対して『杖立ラボ』主催のイベントはもとより、杖立温泉街における多様なイベントの告知や、杖立へのアクセスマップなどを発信している。「杖立ラボの会」においては、地元住民に対してイベントの告知、杖立におけるまちづくりの流れなどの情報を発信し、また杖立ラボ通信という紙媒体による情報もラボの会では提供している。また「ライフステーション 杖立ラボ」では、日常業務として、地域住民と大学などの教育機関、そして外部の専門家を結びつけながら、小国町・杖立温泉街のまちづくりを実践している。また、まちづくりやデザインの相談・学習ができる場として、時にギャラリーや案内所として、柔軟性に富んだ、開かれた場の運営をも行っている。『杖立ラボ』では、このまちづくりという切り口から、風景やライフスタイルを提案していくデザインオフィスでもある「ライフステーション　杖立ラボ」の日常を、数多くのフィールドで届けている。

杖立ラボ　HP（http://lab.tsuetate.com）

「特別な平日」　ちらし

展示会　ちらし

杖立ラボ通信

『杖立ラボ』におけるプロジェクト毎の主体間モデル

■杖立温泉街をとりまく主体

「杖立ラボ」が設立されて以来、杖立ラボの会や、多くのワークショップなど様々な主体に関わる活動を数多く行ってきた。以下に、杖立温泉街においてまちづくりとして関わりのある主体を網羅的に示す。

- 任団 → 地元有志による各種任意団体 ex)べっぴん会・青戸屋チーム
- 観光 → 杖立温泉観光協会
- 旅館 → 杖立温泉旅館組合
- 学生 → 学生
- 大学 → 大学
- 民間 → 民間企業
- 役場 → 小国町役場
- 個人 → 杖立に関わりを持つ地域外の個人 ex)アーティスト・インストラクター
- 住民 → 杖立内の地域住民（上記組織に属していない住民）
- ラボ → 「杖立ラボ」「九州工業大学景観工学まちづくり研究室」「(株)ST環境設計研究所」を含む。

ラボをとりまく主体間モデル

■主体間モデルの作成

「杖立ラボ」による取り組みの中では、これまでの閉じられた主体間関係から、ラボを介して地域内外へと拡張する。またそのことで、今後新たな取り組みにも繋がっていくことが可能となる。「杖立温泉街をとりまく主体」のなかで作成した主体間モデルを用いてプロセス図の明確化を図る。

一般的な公共事業では、役場、民間、住民とがそれぞれ少ない関わり合いをもちながら進められていく。

「杖立ラボ」により、それぞれの関わり合いを持てる機会が多くなっていく。

その後、公共事業や、まちづくりの場において大学や、学生といった様々な主体が関わりを持つようになる。

「杖立ラボ」によって関わりを持てた主体は、さらに「杖立ラボ」を介さないつながりを持つようになる。

■杖立温泉街におけるプロジェクト毎の主体間モデル

動線とたまり場の計画

第1回 杖立ラボの会 1-1

地域の情報発信拠点である公共建築（Pホール）前から、行動基点であるバス停前にかけての歩道整備プランについての検討をラボの会で行った。大学からの助言を受け、公共事業による歩車共存道路を建設することに決定した。

第2回 杖立ラボの会 1-2

Pホールからバス停前にかけての歩車共存道路に用いる煉瓦の色についての検討を、ラボの会において行った。材料メーカーより東京に煉瓦を見せてもらうことで、住民による意見を把握し、大学からの助言を受け、煉瓦の色を決定した。

歩車共存道路工事第1期 1-3

第1回から第2回までのラボの会において決定してきた歩車共存道路の工事が行われた。「杖立ラボ」では、行政と共に施工管理を行っていった。

第6回 杖立ラボの会 1-4

歩車共存道路の延長案として、2案の提案をラボの会で行った。それぞれの考えられるメリットや波及効果を大学の協力のもと作成、提示した。また、案について全戸説明会を行うこと、住民投票による決定方法をとることなどを報告

歩車共存道路住民説明会 1-5

歩車共存道路の延長案について、大学と共に住民への全戸説明会を行った。大学により作成された具体的なイメージ図を利用し、分かり易い形として住民へ伝えた。説明会の後に住民投票を行い、公共事業において住民の意見を繁栄させた。

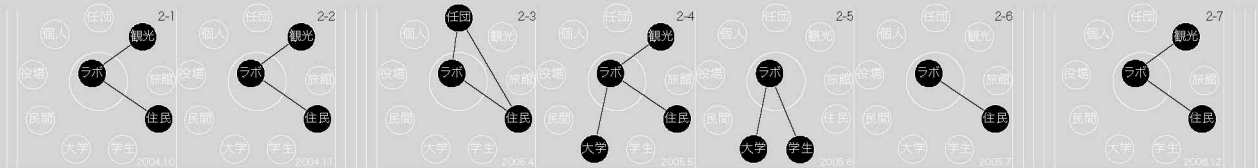
歩車共存道路工事 第2期 1-6

第5回から第6回までのラボの会において決定してきた、歩車共存道路の延長工事が行われた。「杖立ラボ」では、行政と共に施工管理を行っていった。

路地裏サイン計画勉強会 1-7

杖立温泉街の魅力である路地裏に関するサイン計画についての勉強会を行った。民間企業に委託されたサイン計画について、アドバイザーである大学、地元任意団体、そして民間企業と、進む方向性をみなで共有するものであった。

森と緑づくりの計画



第2回 杖立ラボの会 2-1

杖立温泉街は本物の自然に囲まれたまちである。周囲の本物の自然を活かすかたちでまちなかの緑を配することが望ましいと考え、観光協会が持つ土地（Pホール前）において、「杖立ラボ」主導による植栽プランを検討した。

第3回 杖立ラボの会 2-2

第２回ラボの会によって検討されたPホール前の植栽プランについて、具体的な形にもっていくための検討を行った。具体的には学生の作成した模型等を利用して、住民とのイメージの共有を行った。

住民参加型作業 1 2-3

杖立にあるもので撤去した方がよいものを住民に挙げてもらう「引き算WS」によって、最も撤去するものとして挙がったもの（桜橋の歩道にある植栽マス）を住民と共有した。その結果をもとに、住民と地元任意団体による撤去を行った

第5回 杖立ラボの会 2-4

ラボの会によって検討していた、「杖立ラボ」によるPホール前の植栽プランについて、デザイン及び管理方法において提案を行った。土地の持ち主である観光協会と、地元住民を含めてラボの会において、検討を行った。

第6回 杖立ラボの会 2-5

大学と「杖立ラボ」の共同により、Pホール前の植栽プランの具体的な設計案について、模型を利用して、住民とのイメージの共有を行った。

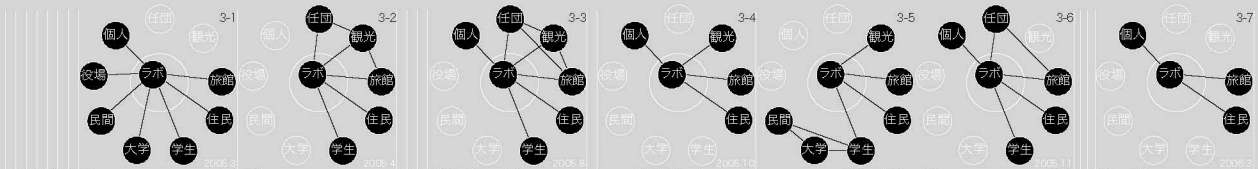
住民参加型作業 2 2-6

検討していた植栽プランにおける煉瓦舗装作業を、ラボ主導のもと、地元住民の手で行った。住民たちの手で作り上げたパブリックスペースであるために、愛着及び管理の点において、意識の変化が生まれるものである。

住民参加型作業 3 2-7

検討していた植栽プランにおける、Pホール前の駐車場の一部に、ラボの提案による植栽を行った。植栽の種類においても、ラボの会において検討を続けてきたために、地元の要望と専門知識がかみ合ったものになった。

「杖立ラボ」が主催・協力したイベント



オープニングイベント 3-1

「ライフスチーション　杖立ラボ」のオープンと併せて、「01　オグニと景観法」「02　企画展：風景チケット」を開催した。九州大、熊本大、九工大の教授及び学生が参加し、役場を含めて、小国町への景観法の適応を検討した。

こいのぼりあげ 3-2

杖立温泉街の代表的なイベントである鯉のぼり揚げにおいて、開催告知並びにボランティアスタッフの呼びかけをweb上にて行い、参加を募った。結果、多くの周辺地域の方や、九州の学生が数多く参加し、地元との交流を行った。

七夕祭り 3-3

杖立温泉街で行われた七夕祭りにおいて開催告知をweb上にて行った。さらに、利用されていなかった既往の建築物の清掃を呼びかけ、住民の手で賑える場とした。その祭りの中では、学生による灯明設置が行われ、イベントを盛り上げた

特別な平日 vol.1 3-4

杖立ラボによる平日プログラム、「特別な平日」の開催を始めた。第１回目は「カキノジン 絵はんこ教室」と名付け、絵はんこ作家カキノジンさんを迎え、絵はんこ教室を開き、地元住民をはじめとして、多くの参加者を迎えた。

背戸屋まつり 3-5

杖立の魅力である路地裏を利用した背戸屋まつりを、地元任意団体と協力して開催した。大学による灯明設置や、アーティストによるライブといった様々なイベントを実施し、立場を越えたの人々が交流する場となり、賑わいを見せた。

特別な平日 vol.2 3-6

第２回目の「特別な平日」として、土壌喰を原料とした焼かない植木鉢【エコポ】の手作りワークショップを行った。九州工業大学環境計画研究室、(株)田川産業との共同のもと、地元住民及び、周辺住民といった多くの参加者を迎

特別な平日 vol.3 3-7

第３回目の「特別な平日」として、絵はんこ作家カキノジンさんを再びお迎えして「カキノジン 絵はんこ教室」を行った。今回は、「杖立ラボ」を会場とし、地元住民及び、周辺住民といった多くの参加者を迎えた。